

## ウェールズの巨人たち

—— 物語と伝説の中から ——

中野節子

その社会で重要と思われる人物をつねに巨大化する物語の伝統ののっつて、古い神々や英雄は、しばしば巨人となってゆく。ブリテン島にも多くの巨人たちにまつわる伝説が残っている。イングランドの丘の斜面に刻まれた二つの巨人像、ドーセット州サーン・アバスの巨人やイースト・サセックス州南部のウィルミントンの大男などは、この地を訪れた人々に、その地の守護者であると同時に、明らかに豊穡をつかさどる神としての巨人像を示している。しかし時代が下るにしたがって、巨人たちはしだいに愚かしい側面をも見せ始める。コンウォール州のカーン・カルヴァ（「カルヴァのケルン」と言う意味）の巨人の物語は、大切な遊び友だちの若者をうっかり殺してしまった気のいい巨人の悲劇的な物語を伝えている。このような心やさしく愚かしい巨人とは対照的に、残虐非道な巨人たち、つまり人食い妖怪も存在する。例えば、「巨人退治のジャック」が退治したような巨人たちである。

ブリテン島の一画を占めるケルト人の国カムリ（Cymru）（ウェールズ）にも、多くの巨人たちが物語や伝説の中に登場し、活躍している。まずは、中世ウェールズの幻想物語集『マビノギオン』（*Y Mabinogion*）と、その他の伝説や詩の中から、何人かを取り上げて、ウェールズ地方の代表的な巨人像を追ってみたい。

### A 物語『マビノギオン』の中の巨人たち<sup>①</sup>

#### 1) ベンディゲイドブラン（Bendigeiduran 又は Bendigeid Bran）

この人物は、「マビノーギの四つの物語」（‘*Pedair Cainc y Mabinogi*’）の中の第二話「スィールの娘ブランウェン」（‘*Branwen ferch Llŷr*’）に登場する巨人である。

「ベンディゲイド」（‘*bendigeid*’）とは、「祝福された」とか「聖なる」という意味で、多分、この物語を筆写したキリスト教の僧による付加であろうと考えられている。「スィール」（*Llŷr*）という「海」を表すウェールズ語からいっても、「四つの物語」の第三話「スィールの息子マナウイダン」（‘*Manawydan fab Llŷr*’）と同様に、ウェールズの神々の一家の系統を引く名家の出であることが分かる。アイルランドの神話「マナナン・マック・リール（*Manannan mac Lir*）の物語」との関連や、アイルランドから別世界の島々への旅を描く、英語で書かれた古いアイルランドの伝説『ブランの航海』（*The Voyage of Brân*）の影響も考えられる。こうして、ケルトの世界に広がっている「ブラン物語」は、後のフランスのロマンスものの中で、「bron・フィッシャー・キング」（*Bron the Fisher King*）（「漁夫王bron」）となってゆくのである。こんな意味からも、ブランという人物は、古代ケルトの神々の一人からくる半神的なイメージを持っていて、巨人として登場しているのも頷ける。

物語の伝えるところによると、彼はマノガンの息子ベリの娘ペナルズィン（Penarddun ferch Beli ap Mynogan）を母として生まれている。ベリの一族もまた、ウェールズと古ノース（The Old Norse）地方（ブリトン人の古くから統治した領域で、スコットランド南部とカンブリア地方をも含める地方）を治めた有力な一家であった。彼はまた、ロンドンの王冠をいただく王であり、ブリテン島の戴冠王でもあったと記述されている（53）。アルディドゥイ（Ardudwy）のハルドレッフ（Hadlech）（ハーレッフ）に宮廷を構えていた。巨大な体格の持ち主で、「いまだかつてベンディゲイドブランを容れるにたる大きさの館はなかった」（55）と描かれているほどである。ベンディゲイドブランの妹ブランウェン（Branwen）を嫁にしたいとやって来た、アイルランド王マソルッフ（Matholwch）の申し出もこころよく受け入れられ、始めのうちは順調にっていたウェールズとアイルランドの関係も、スィール一家の問題児、異母弟のエヴニシエン（Efnisien）の暴挙によってくつがえされてしまった。一時は何とか平和が保たれたものの、数年の月日が経ったとき、アイルランドの地に興入れし、男の子グウェルン（Gwern）までもを生んでいたブランウェンの身に不幸が訪れた。異国の花嫁いびりが始まったのである。それは、ブランウェンが寝室から台所へ追いやられ、毎晩仕事を終えた肉屋にその頬を平手で打たれるという屈辱的な仕打ちであった。しかし、3年の歳月が経過した頃、ブランウェンが練り鉢の縁にとまらせて訓練した椋鳥が、ウェールズに彼女の不遇を知らせたのだ。ベンディゲイドブラン率いるウェールズの軍勢は、苦境に陥ったブランウェンを救うために、すぐにアイルランドに向かって進攻する。ベンディゲイドブランは徒歩で海を渡ってゆき、その背には、豎琴を奏でる楽人を背負って運んでいたという（64～5）。

中でも圧巻は、アイルランドの浜辺で、豚の世話をしていた豚飼いたちによる報告である。

ある日のこと。浜に出て忙しく豚の世話をしていたマソルッフの豚飼いたちが、海の上に見える光景を報告しようとして、マソルッフのところへやって来た。

「殿、ごきげんうるわしゅう」と豚飼いたちが言った。

「神がそなたたちをお恵みくださるよう。ところで、なんの知らせだ」とマソルッフが言った。

「殿、なんとも奇妙なことがございます。木一本も見ることがなかったあの海の上に、森が見えるのでございます」と、彼らは言った。

「それはふしぎだ。で、ほかに何か見えたか」

「はい、殿。その脇に、大きな山がありますので。それは動いておりまして、てっぺんには高い尾根があり、尾根の両側には湖がございました。そして森も山も湖も、みんな動いているのでございますが」（65）

この情景の謎を解けるのは、ブランウェンしかないというので、使者たちが彼女のもとに赴き、答えを得てくる。彼女の説明によると、海上に見える森というのは船の帆桁や帆柱、山は徒歩で海を渡って来るベンディゲイドブランその人、高い尾根とは彼の鼻、両側にある二つの湖は両わきの目であるという。やがてアイルランドの地に上陸したベンディゲイドブランは、川の上に横たえた自分の背の上に、ウェールズの軍勢を載せて通し（67）、ウェールズ軍は勝利したと物語は記している。

しかし、マソルッフがベンディゲイドブランのために、彼を収容できるほどの大きな家を建ててやったり、ブランウェンとの間に生まれたグウェルンに自分の王位もゆずって、両国の間の平和を

取り戻そうと努力したにもかかわらず、またもやあの問題児エヴニシエンによって、その平和も再び破られてしまう。両国は激しい戦闘を繰り返した末、ウェールズの勝利ということで収められるのだった。しかしその勝利といえども、はなはだ厳しいもので、ブランウェンはわずかに生き残ったウェールズの7人の戦士たちと、故国に帰国はするものの、ウェールズに到着するとすぐ、アングルシーのアベル・アラウ (Aber Alau) の地で亡くなってしまう。目の前で自分の息子を暖炉の火の中に投げ込まれて殺された上に、アイルランドとウェールズの二つの国がすっかり荒れはててしまう原因となった自らの存在の不幸を嘆いて、悲しみのために心臓が破裂してしまったからである (72)。そしてまた、脚に毒槍での傷を負ったベンディゲイドブランも、結局は無事な姿のまま故国に戻ることはできなかった。

物語は、ベンディゲイドブランの不思議な首の話を伝えている。毒槍で脚を打たれ、瀕死の重傷を負うベンディゲイドブランは、残った家来たちに、自分の首を即座に切り落として、それを携え、帰国の旅を続けるようにと命じる。一つのタブーを破らないかぎり、生首は腐ることなく彼らと共にあり、いままでの全ての憂さを忘れて旅を続けることができるというのである (72)。一行は首と共に旅を続け、ハルドレッフの宮廷にたどり着いた。生首は彼らと共に宴を楽しみ、全ての憂さを忘れさせるというリアンノン (Riannon) の鳥の歌声を聞きながら、その地に7年間滞在した。その後、彼らは80年の長期にわたって、ペンヴロ (Penfro) (現在のペンブロクシャー) のグワレス (Guales) の宮廷で過ごしていた。その80年を人呼んで「驚くべき首の集い」という。しかしタブーは結局守られず、ケルニューウ (Cernyw) (現在のコンウオール) に面した扉のうち、いまだ閉まったままの、宮廷の第三の扉が開かれてしまい、いままで彼らの身におこった悲しい思い出がよみがえってきて、この地にこれ以上滞在していることができず、腐り始めた生首を携えて、スィンダイン (Llundein) (ロンドンのこと) へ向かわざるを得なくなった。首は、フランスの方角に向けて、ロンドンのグウィンヴリン (Gwynfryn) (「白い丘」という意味) に埋められた。その後長い間、この首のおかげで、ブリテン島はフランスからの攻撃を受けることがなかったと物語は記している (74-5)。

首の埋葬に付随した伝説は、各地に古くから残されている。頭蓋骨の形をした小さな丘ゴルゴタ (Golgotha) というのは、もともとその形から、「頭蓋骨の丘」と呼ばれていた。しかし、そこにはまた、一つの伝説が残されている。すなわち、あのダビデ王 (king David) がヘブロンからエルサレムへ首都を移した際、アダムの首もまた、埋葬されていた地からこのゴルゴタへ移され、守りとしたことから、そう呼ばれているというのである。同様の伝説は、アッティカを守ろうと、エイリュステス王 (king Eurystheus) の首をアテネへ続く道に埋めたというギリシア神話の中にも見られる。一方で、アイルランドには、内国の敵のいる方角に向けて、武装した王たちの立像を埋めさせたという伝説も残されている。いずれも、ある土地を守る目的で、指導者の首や遺骸を埋めたという伝説である。

ブランの息子カラドク (Caradog ap Brân) の神話が成立するにつれて、キノベリヌスの息子カラタクス (Caratacus son of Cunobelinus) との混同が生まれ、ブランの改宗の話が出てくるようになった。1685年、E. スティリンガー (Edward Stillinger) という人物が、カラタクスの一族の者が、聖ポール (St. Paul) にブリテン島への宣教を要請したのだという主張をしている。それには二つの事実が影響していると考えられる。一つは、その頃までに「聖なる」という呼称がすでにブランに付けられて広まっていたこと、もう一つは、エウロスウィッツ (Euroswydd) という人物の手の者によって、スィールが囚われの身になっていたという話が成立していたということである。エウロスウィッツという人物は、カラタクス一家を捕えた、ローマの司令者オストリウス

(Ostorius) だと考えられている。したがって、カラドクの祖父スィール (Llyr) の幽閉というのは、カラタクス一家の幽閉と考えられるのである。スィールとブランはともに、カラタクス (カラドク) によってローマに連行されたと思われる。その後ブランは、聖ポールによってキリスト教に改宗され、アリストブラス (Aristobulus) の一行に加えられて、ブリテン島に戻ってきたと考えられる。そこから彼のブリテン島宣教の話が生まれ、「聖なるブラン」と呼ばれるようになったと推測されるのである。以後ブランは、ブリテン島の「三人の聖なる統治主」(‘Three Blessed Sovereigns’) と呼ばれるようになった。

## 2) 巨人の長イスバザデン (Yspydaden Pen Cawr)

イスバザデンという人物は、「アーサー王伝説」の主人公アーサー (ウェールズ語ではアルスル (Arthur)) がはじめて登場してくる『マビノギオン』の第7話「キルッフとオルウェン」(‘Culhwch ac Olwen’) に、オルウェンの父として描かれている巨人である。

継母から、何処にいるとも知れないオルウェンという娘を見つけてこないかぎり、結婚はできないという呪いをかけられた若者キルッフの花嫁探しのようすが綴られる物語である。叔父のアルスルは、若者の探索の旅に、自分の宮廷の6人の家来を付き添わせて出発させている。いずれも特殊な能力を有する家来たちであった。やっとこの娘の情報を獲得した一行は、結婚の承認を得るために、娘の父親、巨人の長イスバザデンの館にやってくる。砦に到着したキルッフの一行と巨人との対面の様子は、次のように描かれている。

そして彼らは立ちあがり、彼女のあとを追って砦へと出かけてゆき、一声もあげさせることなく、9つの門の9人の門番と9匹のマスチフ犬を殺してしまった。

それから彼らは、大広間へ入っていった。

彼らが言った。「神と人との名にかけて、御身にご挨拶いたします、巨人の長イスバザデンよ」

「して、御身らへも挨拶いたそう。ところで、どこへ行かれる？」

「われらは、御身の娘御オルウェンどのを、キリZZの息子キルッフにいたどうかと、こちらへ参上した次第」

「わしのろくでなしの家来どもと、役たたずどもはどこにおる？」と、彼は言った。「わしの未来の婿どのを見るために、両の脛の下に熊手を入れて、持ちあげてくれい」

そのようになされた。

「明日、ここに来るがよい。答えをしんぜよう」

彼らは立ちあがった。(180~1)

しかし巨人は、そのまますんなりと一行を帰したのではなかった。イスバザデンは、毒を塗った石槍の一つを引っつかむと、彼らの背後から投げつけたのである。一人の家来がそれを掴んで投げ返すと、槍は巨人の膝がしらに命中し、毒を塗った鉄が膝を痛めつけ、巨人は歩行に支障をきたすことになる。翌日の石槍は、巨人の腰のくびれた背部を打ち、固い鉄が胸と腹を痛めることになった。三日目の石槍は、巨人の目を直撃し、うなじにまで突き刺さる。その結果、巨人の視力は衰える一方になり、涙とめまいに悩まされることになったと記されている (181~2)。おもしろいことは、巨人の投げた石槍が、そのたびに鉄槍に変わることである。石器文化の中に生きていただろうと思われる巨人と、鉄器文化の中で活躍するアルスルの戦士たちとの争いの様子が偲ばれる箇所

ある。

このようなやり取りがあった後、巨人は若者キルッフに39件〈又は38件〉の課題を与え、それらを成し遂げたならば、娘を嫁にくれてやろうと言う。娘が結婚し、父親のもとを離れるやいなや、自分の命のなくなることをよく心得ていたからである。課題は全て、二人の結婚のための宴に必要とされるものを、獲得してくることであった。しかし結局、若者キルッフは、アルスルの手助けを受けて、めでたく課題をこなし、意気揚揚とイスバザデンの砦に戻ってくる。

その様子は、次のように描写される。

それから、キルッフは出発した。カステンヒンの息子ゴレイと、巨人のイスバザデンに恨みのある者、それに、これら不思議の品々とともに、イスバザデンの館に向かった。

プリダインのカウがイスバザデンの髯を剃った。すなわち、骨に届くまでその肉と皮膚とを剃り、両耳も剃り落としてしまったのだった。

それから、キルッフが言った。「髯は剃りおわりましたか」

「ああ、終わったぞ」と巨人が答えた。

「それでは、今や、あなたの娘御は私のものですね？」

「おまえのものだ」と巨人は答えた。「そのことを、わしに感謝せんでもよいぞ。おまえを助けてくれたアルスルに礼を言うがよからう。わしは、自分から進んでそうしようとは思わなかったのだからな。さて、そろそろ命をしんぜる時がきたようだ」

それから、カステンヒンの息子ゴレイが、彼の頭の毛をつかんで丘の上にひきずってゆき、首を切り落として外壁の杭の上に掲げた。そして、ゴレイがこの砦と領地を獲得したのだった。(213~4)

物語に描かれている巨人イスバザデンは、むくつけき大男で、家来が熊手で、そのもじゃもじゃの眉毛を持ち上げてやらないかぎり、はっきりと目を開けてものも見られないほどであった。一方、彼の名前となっている、「イスバザデン」というのは、「希望」という花言葉をもつサンザシを意味している。巨人の娘オルウェンは、名だたる美女で、その姿を垣間見たキルッフが、瞬時に激しい恋に落ちたほどの乙女であった。巨人の娘が美しく、たおやかな美女だというのは、この物語に限らず、他の物語にも散見する、ウェールズの物語の特徴の一つである。

### 3) 巨人ウルナッハ (Wrnach Cawr)

イスバザデンが提示した課題の中でも最大の難問となるのが、猪の長トゥルッフ・トゥルウィス (Twrch Trwyth) が彼の両耳の間に所有している櫛と大鋏みを取ってくるというものであった。いずれも娘の婚礼のための身だしなみを整えるために、自分の髪を切る行事に必要な道具である。トゥルッフ・トゥルウィスがたやすくそれを渡すはずはなく、なんとしても手に入れるためには、彼を殺すほかはない。唯一彼の命を取ることができる短剣は、巨人ウルナッハが持っていたのである。彼らは一計をめぐらし、一行の中の一人、戦士カイ (Cai) をこの世でもっとも腕のよい短剣研ぎ師にたてて、巨人の砦に乗り込むことにする。

短剣を研ぐ仕事が終わると、カイは、その仕事が満足のゆくものかどうかを確かめてもらうかのように、ウルナッハの手に持たせた。

巨人が言った。「この仕事はじょうできだ。満足だぞ」

カイが言った。「あなたさまの剣を傷めたのは、その鞘でございます。その木製の横木をとり除くために、私にお貸しください。新しいものをおつくりいたしましょう」

彼は鞘を外し、片手に剣を取った。巨人のかたわらまでやって来て、あたかもその剣を鞘に収めるかのようなふりをした。そしてそれを巨人の頭に収め、一撃で首を切り落としてしまったのである。

彼らは砦を攻撃し、宝物もいっしょに持ち去った。そしてその年のまさに最後の日に、彼らはアルスルの宮廷に戻った。巨人ウルナッハの短剣もいっしょだった。(195～6)

このようにして、一行は見事にウルナッハの短剣を手に入れることに成功した。

『マビノギオン』の他の物語には、巨人までとはいわないまでも、人一倍体の大きい登場人物が描かれている。たとえば、第二話「スィールの娘ブランウェン」の物語の中で、アイルランド王マソルッフへ与えられた「再生の大釜」(戦いで死んだ兵士たちを一夜で再生させる魔力をもつ大釜)をウェールズの地に持ち込んだとされる、スァサール・スァイス・ゲヴネウイド(Llassar Llaes Gyfnewit)とその妻の様子は、次のように描写されている。

「…すると、背に大釜をかついだ、赤黄いろい髪 of 男の姿が目に入ってまいった。さながら怪物のごとき男で、体軀は巨大、山賊のように獐猛な顔つきであった。女が一人、あとに続いておりました。この男がいかに巨きいと申しても、女は、その男の二倍の大きさがありましたな。…」(60)

また、七話「キルッフとオルウェン」に登場する、イスバザデンの砦を守る羊飼、カステンヒン(Custenhin)とその妻にしても、ただの人ではない。羊の番をする巨大なマスチフ犬を率いる夫の羊飼いといい、丸太をその両腕の間に差し込まなかったら、首がねじ切れてしまったらだろうというほどの歓迎の抱擁をするその妻にしても、とうてい普通の人間とは思われない(178)。

このように、物語では、その人物の人並みはずれた能力を示すのに、体の大きさを持って、表現する場合が多い。ウェールズ各地に散見する巨人の話は、伝説となるような巨大な力を持って、この地に活躍していた数々の人物の存在を示すよい例となっている。興味深いことには、これら巨人の娘たちが、この地を代表する美女たちであったということである。一番よい例は、若者キルッフの恋い焦がれた、巨人の娘オルウェンの描写に見られる。

乙女は、炎のように燃える真紅の絹のローブを身にまとい、高価な真珠とルビーの埋めこまれた赤金のトルクを首につけていた。髪は黄色はバナディルの花のそれよりも深く、肌の白さは海の泡よりもさらにさえざえとしていた。両の手と指は、地中からわく泉の中の細かい砂に咲き出る撫子の、その若芽より白く、目は、籠にとらわれた若鷹や三たび羽を換えた隼の、その眼よりも輝いていた。胸は白鳥のそれよりも白く、唇は真紅の花よりもなお紅かった。この乙女の姿を目にした者はだれしも、たちまち恋に落ちてしまうにちがいない。乙女が歩みを進めると、その足もとから四つの白いクローヴァの花が咲き出てきた。そのため、乙女はオルウェンと呼ばれていたのがあった。(179)

ここに描かれているのは、まさに、ウェールズを代表する美女の姿である。

## B 伝説の中の巨人たち<sup>(2)</sup>

### 1) 巨人オグルヴァン (Ogrfan Gawr)

ウェールズの「三題歌」(‘triad’)によると、いずれもグェンホヴァル (Gwenhwyfar) (「白い妖精」という意味) と呼ばれていた、アルスルの「3人の偉大な后たち」の一人の父とされる巨人である。

ウェールズに残されているかずかずの詩や伝説に、「オグルヴァン」、または「ゴグヴラン」(Gogfran) として登場する巨人で、各地に、彼の居城とされる城や砦の名前が残っている。中でも、「ペニアルス写本」(Peniarth MS.) 118には、巨人とアルスルに関連する、次のような記述が残されている。

シュロップシャーの辺境の地に、ブロン・ウルガン (Bronn Wrgan) と呼ばれる地があり、そこは巨人たちの住処といわれているところだった。彼らは、そこにゴグヴラン・ガウルの娘、グウェンフォヴァルの何人かの兄弟たちを幽閉した。このことがグウェンフォヴァルをたいへん悲しませていた。アルスルが、その巨人たちを殺して、彼らを救い出してやったのである。彼は、中でももっとも大きな頭をとって、それをクヴクラス (Cuwclas) 城へむかう道の途中にある川の真中に、飛び石として置いた。この石の上に足を置いたとき、アルスルは、「この頭が、川の中で、まるで石の如く育つように」と言った。それ以来、この川は、アヴォン・テヴェディアイド (Afon Tyfediad) (「育ちの川」という意味) と呼ばれているのである。

アヴォン・テヴェディアイドという川は、クナックラス (Knucklas) を通過して、ウェールズを流れるテーマ (Teme) 川のことである。

### 2) リタ・ガウル (Rhita Gawr) (「赤い巨人」)

この巨人は、フリュッザ・ガウル (Rhudda Gawr) ともいわれ、アルスルに関するさまざまな伝説の中に登場する。モンマスのジョフリー (Geoffrey of Monmouth: c. 1100-1154) の『ブリテン諸王の歴史』(*Historia Regum Britanniae*) には、リト (Ritho) として登場している。この巨人は、最終的にアルスルとの決闘に敗れ、アラヴィウス・モンズ (Aravius Mons) (スノーダンのエレリ) の地で殺されたことになっている。『諸王の歴史』(*Brut y Brenhinedd*: 13世紀～15世紀) では、リタ・ガウルと表記されている。この巨人とアルスルをはじめとする多くの王たちとの戦いの顛末は、「ペニアルス写本」118の中に詳しく述べられている。エレリでの戦いの後で、彼の身体はペンスェン (Penllyn) のアラン・マウル (Aran Mawr) 山の近くに移され、彼の墓はブルッフ・イ・グロイス (Bulch y Groes) の下に造られたという。また次のような話も残されている。

アルスルの時代、グウィネッズ (Gwynedd) 地方の王を名乗るイトトという巨人 (Itto Gawr) がいた。両者は、メリオネッズ (Meirionedd) のマウズイ (Mawddwy) とペンスウェン (Penllyn) の間の地、ブルッフ・イ・グロイスの丘の頂上で戦った。しまいには武器を捨てて取り組み合い、くみつぼぐれつ戦った末、丘の頂上から平原へと転がり落ちてゆき、そこで、お互いの髭をむしり取った。そのためこの丘は、フリウ・イ・バルハイ (Rhiw y Barfau) (「髭の斜面」の意味) と呼ばれるようになった。その後、彼らは短剣で戦って、現在もイトトの墓が見られる斜

面のふもとで、アルスルがこの巨人を殺したのである。この地には、キンスイド（Cynllwyd）川が、ブルッフ・イ・グロイスからバラ（Bala）湖に向かって流れている。

この地方の多くの伝説が、リタ・ガウルはスノードン周辺で殺されたと伝えている。その頂は、彼がその地に葬られたことにちなんで、グィズバ・リタ（Gwyddfa Rita）（「リタの塚」の意味）と呼ばれ、リタの兵士たちが一人一人石を積んで、この塚を造ったということになっている。この場所は一般に、エル・ウィツバ（Yr Wyddfa）（「塚」の意味）として知られる。15世紀初頭のベッジゲラルト（Beddgelert）のフリス・ゴッホ・エレリ（Rhys Goch Eryri）は、「冷たく広大な尾根の上、リッカ・ガウルが横たわる」（‘On the ridge cold and vast, / There lies Ricca Gawr’）と歌っている。

しかし、最も広く流布したリタ・ガウルにまつわる髭の物語の概要は、次のようなものであろう。エルギング（Ergyng）の王エルブ（Erb）の二人の息子たちネニオウ（Nynnio）とペイビオウ（Peibio）の二人は、どちらが最高の家畜とそれらを養う草地を獲得するかということで、激しく争っていた。その議論は、とうとう、ネニオウが天空の全てを自分の家畜に食ませる草地にしたいと豪語するようになるまでに達したのだった。ペイビオウの方は、自分の家畜をネニオウの天空の草地に点在する星や天の川にたとえて自慢する始末である。とうとう二人の間で熾烈な戦いが起こった。

この噂を聞いた、北ウェールズ一帯を支配していた巨人リタは、「天空で草を食ませる権利は、当然俺さまのものだぞ！」と大いに腹を立て、すぐさま軍勢を向かわせて、二人の王を降伏させた。その後、彼らの愚行を戒めるために、王たちの髭を剃り落として、小さな切れ端にし、それを使って自分の被る帽子を作って被ったのだった。しかしそれでは治まらなかった。ブリテン中の残りの26人の王たちが、不服を唱えてリタのところへ進攻してきたのである。巨人は、この軍勢をもやすやすと打ち負かし、26人の王全員の髭を剃り落とし、今度はそれらを繋ぎ合わせ、自分のマントを作らせたのである。それが出来上がると、巨人は、そのマントを纏って、夜ごと天空をながめては、自分の家畜の数を数えて満足していたという。しかし隣国の王たちもまた、しだいに不満を強めてゆき、結託してリタのところへ進攻してきた。しかし彼らも同じように、リタに敗北してしまい、髭を剃り落とされて、巨人のマントのすそに縫い付けられてしまった。その結果、髭を携えた王は、近隣に一人も見られないようになったという。

そんなとき巨人は、南の地方にアルスルという若い王がいるという噂を耳にした。その地の全員の王の髭を獲得したものの、この若い王の髭だけが残っていることが、まことに気に入らなかった。「そのままにしておいたら、またまたあの二人の者と同じように傲慢になってしまうかもしれない。俺さまが何とかしてやらねば」と巨人は考え、すぐさま軍勢を集めて、この王を降伏するために出かけていった。するとこの王アルスルが言った。「私の髭はまだ生え始めたばかりなので、とてもあなたのマントの端を満たすわけにはいかないようです。それよりもっと適当な髭がありますよ」。そう言うと、軍勢を率いて激しい勢いで攻めてきたのである。さしもの巨人も戦況の不利をさと、自ら髭を切り落とし、その髭でマントの端を整えたのだった。こうして巨人はアルスルの臣下にくんだり、巨人の髭は彼のマントの一番下の縁に縫い付けられ、それ以後、アルスルに対して恭順の意を示すしるしとなった。今でもウェールズには、冬の夜に積もった雪を表して、「リタの髭のように積もった」という表現が残っている。

また別の話では、巨人はアルスルの軍勢に殺され、その後アルスルが巨人の倒れた土地に石塚を築かせ、それが「フリュッザ（リタ）のケルン」（‘Gwyddfa Rhudda’）と呼ばれたと語られている。やがてときが経過するにつれて、もとのフリュッザ（リタ）の名前は忘れられてしまい、ケル



ンを意味する「エル・ウィッズヴァ」(Yr Wyddfa) としてのみ残り、今では、スノードン山を示す語として、広く使われているのだということである。

### 3) 巨人イドリス (Idris Gawr)

この巨人は、6世紀の半ばから7世紀に活躍したメリオネズ (Merionydd) の王の一人として知られ、グウィズノ (Gwyddno) の息子であったと考えられている。彼はいつも、メリオネズ地方にある大きな山カダイル・イドリス (Cadair Idris) (「イドリスの椅子」という意味) の上に座って、自分の領地に目を配っていたという。この話は、イドリスが王位を退いた後に、山の上の小さな隠居所に引きこもって僧となって暮らしたところから生まれたのではないかととも考えられており、彼の墓グウェリ・イドリス (Gwely Idris) という場所も、この山の上に残されている。しかし、イドリスは亡くなる前に再び還俗し、セヴァーンの地で、ノーザンプリアのオスワルド (Oswald) 王と戦って632年に殺され、息子のスアルダ (Sualda) が彼の後を継いだとされている。現在でも彼の座ったといわれる岩に刻まれた椅子の上で、一夜を過ごした者には、死か狂気か、さもなくば詩的発想が与えられると信じられている。

### 4) バルクロイディアド・ガウレス (Barclodiad Gawres) (「女巨人のエプロン」の意味)<sup>(3)</sup>

北ウェールズのロ・ウェン (Ro Wen) とアベル (Aber) の間にあるローマ街道には、たくさんの物語が残されている。そのうちの一つに、新しい家を建てようと、アングルシーへ向かって旅をしていた巨人の夫婦にまつわる話が残されている。

夫の巨人は、両腕に扉の枠を作るための大きな石を抱えていた。妻の方はといえば、エプロンに小さな石を一杯に入れて歩いていた。二人が今はブルッフ・イ・ゼウヴァイン (Bwlch y Ddeufaen) (「二つの石の道」の意味) と呼ばれているところを歩いているとき、反対の方角からやってくる靴職人と出会った。この辺の道に詳しくなかった巨人たちは、この靴屋にどちらの方角に行ったらよいか教えてくれと尋ねた。

そろそろ足が痛くなってきた二人が、あとどのくらいかかるだろうと聞くと、いたずらっぽいくばせをした靴職人は、修理をするために運んできた12足もの靴を眺めながら、「ここまで来るのに、この全ての靴を履きつぶしたほどですよ」と答えたのだった。

巨人はうめき声を上げ、持っていた二つの石を落してしまった。妻の方も、すっかりがっかりして、うんざりしたように両手を空中に上げたので、エプロンの中の石を全部地面に落してしまった。そんなわけで、今でもそこにあるこれらの岩は、「バルクロイディアド・ガウレス」(「女巨人のエプロン」という意味) と呼ばれているというのである。

このように、ウェールズの地名に関連して、巨人にまつわるさまざまな物語が残されているのが分かる。いずれも大きな力を持って活躍した、この地の有力者たちの姿を留める話である。ウェールズの巨人たちに共通した特徴の一つは、神のような高潔な心をもった巨人たちから、民話に登場する巨人たちに至るまで、いずれも愛すべき性質を持ち、人々に歓迎されていたということである。邪悪で悪意を持った巨人たちの姿はなく、愚かしくも、人の良い巨人像となっているのが分かる。

このように個性的な巨人たちと、彼らをとりまく美女たちが活躍する古きケルト人の国ウェールズ (Cymru) は、語り継がれた伝説とその背景となる土地の中に、彼らの力と美を誇る多くの物語を刻む、「魅惑の国」である。

#### 注

- (1) 使用テキストは、中野節子訳、徳岡久生協力、『マビノギオン ― 中世ウェールズ幻想物語集』(JULA 出版局, 2000 年) による。( ) の数字はページを表す。
- (2) 伝説の中の巨人たちについては、主として、Peter C. Bartrum 著, *A Welsh Classical Dictionary* (The National Library of Wales, Aberystwyth, 1993) による。
- (3) Meirion Hughes & Wayne Evans 著, *Rumours and Oddities From North Wales* (Gwasg Carreg Gwalch, Llanrwst, 1995) による。

#### 参考文献

- 1) Bartrum, Peter C., *A Welsh Classical Dictionary*, The National Library of Wales, Aberystwyth, 1993.
- 2) Bromwich, Rachel, edited and translated, *Trioedd Ynys Prydein (The Triads of Britain)*, University of Wales Press, Cardiff, 1961, second ed., 1978, third ed., 1998.
- 3) Hughes, Meirion & Wayne Evans, *Rumours and Oddities from North Wales*, Gwasg Carreg Gwalch, Llanrwst, 1995.
- 4) Stephens, Meic., ed, *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, Cardiff, 1998.
- 5) キャサリン・ブリッグズ著, 石井美樹子, 山内玲子訳, 『イギリスの妖精』, 筑摩書房, 1991 年。
- 6) キャサリン・ブリッグズ編著, 平野敬一, 井村君江, 三宅忠明, 吉田新一訳, 『妖精事典』, 富山房, 1992 年。
- 7) ジェフリー・オブ・モンマス著, 瀬谷幸男訳, 『ブリタニア列王史』, 南雲堂フェニックス, 2007 年。